

Title	行為と赦し：ハンナ・アレント研究(6)
Author(s)	亀喜, 信
Editor(s)	
Citation	大阪府立大学紀要（人文・社会科学）. 2009, 57, p.23-34
Issue Date	2009-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10466/11882">http://hdl.handle.net/10466/11882</a>
Rights	

# 行 為 と 赦 し

## —ハンナ・アレント研究(6)—

亀 喜 信

人間はある行いを、それを行うこと自体に意味があると判断し、実行することができる。生存のためでもなく、生活の利便のためでもなく、行い自体を目的とする活動をアレントは「行為」(action)と呼んだ。人は自ら行為を始めることができる。しかし行為は決まり切った標準的な行動とは異なるため、その結果は予測できない。行為は他者の思いがけない反応(reaction)を呼び起こし、場合によっては他者を傷つけ、不幸にするかもしれない。しかし一度為された行為は取り返しが付かない。アレントは『人間の条件』(1958年出版)のなかで、行為の不可逆性を補うものとして、「赦す能力」(faculty of forgiving)を挙げる。「自分の行いから生じる結果から解放され、赦されることがなければ、わたしたちの行為能力は一つの行いに閉じ込められ、そこから立ち直ることはできないだろう。」(HC,237)<sup>1</sup>けれども1958年以前の日記を辿ると、彼女は赦すということについてもっと複雑な思索を続けていた。本論文は、『人間の条件』発表までの赦しをめぐる彼女の思索を、日記を中心に辿り直し、彼女の行為概念と政治理解の一端を明らかにしようとするものである。

### 1. 和解と赦し

1950年6月、アレントは日記のなかで、「赦し」(Verzeihung)と「和解」(Versöhnung)について記している。赦すことは「根本的に質的に隔てられた者」(prinzipiell qualitativ Geschiedenen)のあいだで成り立つのであり、赦す者と赦される者とのあいだの平等を破壊し、それによって「人間的な関わりの根底」(das Fundament menschlicher Beziehungen)を破壊してしまう。それに対して和解とは、出来事を受け入れるところに起きるのであり、和解する者は他者の犯した不正という重荷を進んで共に担うことであるとアレントは考えた。つまり赦しは平等を破壊し、和解は平等を再建するというのである。(DT-I,2-3)和解とは、不正を犯した人が悔い改め、罪を償うのを支え、その重荷を共に担うことを通して、その人との「人間的な関わりの根底」を維持することである。

しかしこの日記の記述と『人間の条件』とで相反するよう見える「赦し」の理解に通底するのは、行為という仕方で交わる人間の結びつきを守るという立場である。『人間の条件』において赦しは、人間が自らの行為の結果のうちに閉じ込められ、新たな行為への途を閉ざされ、他者と交わる可能性を失うことのないように、行為の結果から解放することとして理解されている。他方の日記においては、赦すことは人々の平等な関係を破壊し、行為によって結びつく可能性を閉ざすがゆえに、批判の対象となっている。しかし日記において、平等を再建するた

めに共に過ち（不正）を担おうとする和解という途が提示されていたことを勘案すれば、アレントが『人間の条件』で述べた「赦し」とは、日記で提示された和解へと通ずるものと解釈することができる。いかなる人間も、自らの行為の結果を予見することはできない。行為という仕方で交わる限り、いかなる人間も過ち（不正）を犯してしまう可能性がある。そのリスクを恐れるとき、人は行為を放棄して社会の標準的・平均的行動に順応し、自分の責任を社会に転嫁する。それに対して人々があくまで行為による交わりを守り、平等な人間関係を維持しようとするなら、行為に伴う不測の過ち（不正）に対する責任を共同で担うという選択を共有することができる。

このように赦しを理解するなら、それは過ち（不正）を水に流したり忘れ去ったりすることではない。赦すことは、過ちの責任を共に担うことにより、行為に伴うリスクに対抗しようとする意志、行為という様式によって他者とともに生きようとする意志に基づいている（HC,245-246）。人間は過ちを犯した人を赦すことができる。赦されたからといって罪が消えてなくなるわけではないし、そもそも罪そのものは赦されるものではない。しかし人間は新たに始めることのできる存在であり、自らが犯した過ちを悔い、償って生きることができる。この人間という存在を尊び、肯定し、受け入れることが赦すということである。人が赦すのは罪ではなく、罪を犯した人格である。赦すことは、悔い改め、新たに始めるという人間の自由な存在そのものを目的とする。人格というものが個々の行いを越えた新たな始まりであることは、人間の自由の核心であり、赦すことはその自由を守る行為である。しかし自らの罪を認めない者、あるいは自らの罪に開き直って悔いることのない者は、赦されることはないだろう。その人間は、自らの過去を担いつつ新たに始める存在として生きることが、自ら放棄しているからである。

アレントは1945年に発表された論文「組織化された罪と普遍的な責任」の中で、組織的罪について論じている。罪は罪の意識がなければ成り立たず、罰は罪人が責任能力を持つ人格であるという証しが必要で成り立たない。しかし組織の中でただ命令に従って行動する人々は、罪の意識が麻痺し人格を放棄しているのであり、ナチによるユダヤ人の絶滅計画はそのような人々によって実行された。それをアレントは「システムティックな大量殺戮」ないし「組織的  
大量殺戮」（administrative mass murder）と呼び、それが西洋のそれまでの政治的な思考や行為の枠組みや概念を押しつぶし、正義の感覚の土台を破壊してしまったと論じている（EU,126-127）。組織の中で与えられた命令に従うだけの人間は、自分で意味があると判断した行為を自ら始める力を放棄し、行為によって他者と結びつくことができず、互いの行為の結果を共に担う責任を喪失する。それは人格を失うことに他ならない。そして彼女は『全体主義の起源』（1951）のなかで、「絶対の悪」は怒りによって復讐することもできず、愛によって耐えることもできず、友情によって赦すこともできないと記している（OT,459）。それは「絶対の悪」が人格を放棄した人々によって遂行されたからである。怒りや愛、友情は人格としての人間に対して成り立つものであり、自ら考え判断することを放棄し、自動機械のように命令に従う人間に対しては、怒りや愛は素通りしてしまう。人は、自ら人格を放棄してそこに居直る人間については、赦すことも罰することもできない。赦しや罰は人格に向けられるのであり、機械を赦したり罰したりすることはできないからである。人格を放棄した「誰でもない存在」の組織

が官僚制であり、アレントはこれを全体主義的統治の柱の一つと考える。特定の民族を絶滅しようという恐るべき企ては、超人的で悪魔的な能力を持つ人間によって遂行されたのではない。それは、思考を放棄し現実との接点を失った極めて平凡な人々、ただし極めて整然と組織された人々によって行われたのであった。「(...)最大の罪は、誰でもない存在 (nobodies) によって犯された罪、つまり人格であることを拒否した人間によって犯された罪である。」

(RJ,111) アレントの言う「根源的悪」とは、人格を放棄した人々の組織が、人格を剥奪された人々の群れを、モノとして処分することを指している。そこには、人格と人格とのあいだで成り立つ善悪の枠組みを無効にしてしまうような、根本的に異様で新しい出来事が出現している。その出来事に立ち会う者は、それをどう判断してよいのか分からない無力感に襲われてしまう。

アレントは晩年の未完の著作『精神の生活』のなかで意志を論じ、「結びつける働き」(binding agent) としての意志は愛としても定義できると述べている。そして誰かを愛すること、「わたしはあなたが存在することを欲する」と言うことほど、大いなる肯定はないと述べている (LM,102-104)。この「わたしはあなたが存在することを欲する」というアウグスティヌスの言葉は、『全体主義の起源』の中でも用いられていた。

「この単なる存在、すなわち誕生という神秘によってわたしたちに与えられ、わたしたちの身体の形と精神の能力を持つすべての者は、友情と共感という思いがけない偶然によってのみ、あるいは愛という偉大で計り知れない恩恵 (grace) によってのみ、相応しく扱われる。愛はアウグスティヌスとともに〈わたしはあなたが存在することを欲する〉と言うのであり、この至高にして無上の肯定には特別な理由など挙げることはできないのである。」

(OT,301)

彼女にとって政治的な生とは、行為と言論という仕方で他者と共に生きることである。この政治的な生を欲する意志は、行為に伴うリスクに耐えるため、自ら進んで赦し約束する意志となる。それは突き詰めれば、自由な存在である限り人間を無条件に肯定する意志であると言える。人間の存在を肯定することは、自然法のように人間を越えた法として前提されているのではないし、肉体的必要や欲求に基づくものでもない。「至高にして無上の肯定」(supreme and unsurpassable affirmation) とは、文字通りそれを越える上位の根拠を持たないのであり、それ自体が一つの行為であり、自由な始まりである。自由な人間の「単なる存在」(mere existence) が、自由な応答としてこの肯定を呼び起こすのであり、「友情と共感という思いがけない偶然」とはこの無条件の肯定に他ならない。アレントは 1954 年に発表された論文「理解と政治」のなかですでに、赦すことは一つの行為であると記していた (EU,308)。この肯定を単なる恣意 (決断主義) と区別するのは、明証的な真理や理性の論証ではなく、単なる存在の呼びかけとそれへの偶然の応答という、自由な存在のあいだの相互的な呼応である。それが「行為と言論という形式で他者と共に生きようとする意志」となり、一つの政治体を支える土台となることを、アレントは希求するのである。

それはまた、複数の自由な存在の交わりから成り立つこの世界を愛する（肯定する）ことでもある。確かに人間は死ぬ定めにある存在であり、人間の生は儚い。それゆえアウグスティヌスは神を愛することを説いた。しかしアレントは、人々が自由な存在として交わり、互いの存在を肯定し、過去を受け継ぐことによって成り立つ「世界」というものが、儚いものだとは考えない。彼女はアウグスティヌスに倣って、人を無条件に肯定することとして愛を理解する。しかしその愛は、神が人を愛し給うように隣人を愛する（神を介して隣人を愛する）のではなく、自由な存在である限りの人間の呼びかけに応じることであり、人を直接に愛することである。人間は罪を背負って生まれてくるのではなく、人間が生まれるということは新たな始まりであり、「神秘」であるとアレントは考える。人間のあいだに区別を設け、異なる存在を「敵」と見なして絶滅しようとすることは、根源的な悪である。しかしそれが悪なのは、すべての人間が等しく神の被造物であるからではなく、すべての人間が等しく自由な存在として生まれるからである。ロナルド・ベイナーの言うとおりに、アレントはアウグスティヌスに対して、「世界を愛することは無益ではない」と答えたのである<sup>2</sup>。

## 2. 語ることと赦し

アレントは、1950年6月の日記では、和解することは出来事を受け入れ、他者の犯した不正という重荷を進んで共に担うことであると規定していた。それは『人間の条件』（1958）では赦しとして捉え直されたが、それ以降に和解という言葉がアレントの著作から消えてしまったわけではない。彼女は1968年に発表された「イサク・ディネセン」という作品の中で、「物語を語ることは、意味を定義するという誤りを犯すことなく意味を露わにし、現実にあるがままの事物に同意し、それと和解することを可能にする（...）」と述べている（MDT,105）。ある出来事を語ることは、その出来事が自分にとっていかなる意味を持つかを定め、それを自分の「生の物語」のうちに受け入れることであり、同時に自分の生を歴史という世界の大きな物語のうちに位置付けることでもある。それはまた、自分がその出来事にどのように関わるかを定め、世界のうちで自分がこれからどう生きるかを決めることでもある。それが現実に対する「同意」（consent）であり「和解」（reconciliation）である。また、この作品の前年に発表された「真理と政治」（1967）では、既に次のように記されていた。

「現実（reality）は事実や出来事の全体（totality of facts and events）ではなく、それ以上のものである（...）。事実（what is）を述べる人は常に物語を語るのであり、物語のうちで個々の事実は偶然性を失い、人間にとって理解可能な意味を獲得する。（...）事実の真理を語る者は、物語を語る限りで現実との和解を生むのであり、ヘーゲルはそれが哲学的思考の究極の目標であることを理解していた（...）。」（BPF,261-262）

現実是个々の事実や出来事の総和ではない。人間の生きる現実とは意味づけられた世界であり、その中で個々の事実や出来事は相互に関連しあう。理解を越えたあまりに悲惨な出来事、

耐え難い苦しみを引き起こす出来事に遭遇すると、人はそれを容易に現実として受け入れられない。その出来事を現実として認めれば、自分の「生の物語」が土台から毀れ、生きる意味が消失してしまうからである。自分にとって大切な人を失ったとき、そこで時の流れが止まり生活が麻痺してしまう。その出来事が自分を圧倒して現実との結びつきを遮断し、生きる意味が見出せなくなる。しかしそれでも生き続けるためには、その出来事を現実として受けとめ、あらためて自分の「生の物語」を語り直さねばならない。それは、その出来事を自分がどう受けとめて生きていくかを定めることに他ならない。「生の物語」を語り直すとは、見たくないものから目を逸らしたり、思い出したくないことを忘れてたりすることではない。アレントは先の引用文の後で、「物語を語る者（歴史家ないし小説家）の政治的はたらきは、物事があるがままに受け入れること（acceptance）を教えることである。」と記している（BPF,262）。耐えがたい出来事や赦しがたい行いを、受け入れやすいように美化したり作り替えたりするのではなく、ありのままに受け入れることは、ひたすら苦しいことではあろう。しかしそこからしか「生の物語」は始まらない。第二次世界大戦中、多くのユダヤ人が強制収容所で殺されたことは、現実として受けとめられ語られねばならない。それはいかなる意味づけも拒絶する根源的な悪ではある。しかし人間は現実はその罪を犯したのであり、「意味ある世界」を破壊したのであり、わたしたちはこの悪を共に担わねばならない。それがアレントの言う和解である。1950年の日記に記されていた和解という言葉は、これらの作品の中で、物語を語ることとして捉え直され、生き続けている。物語を語ることは、自分自身を問い質す呼びかけとして現実の出来事を受けとめ、それを担い、繰り返し応答することである。実は『人間の条件』が出版された翌年の1959年、「暗い時代の人間性」という作品の中で、和解は語ることとして既に現れていた。

「わたしたちは過去を支配したり無効にしたりはできないが、過去と和解することはできる。（…）そのためには過去を想起し、それを語らねばならない。語ることはどんな問題も解決しないし、苦しみを鎮めもしない。しかし出来事の意味が生き続ける限り、過去との和解はそれを繰り返し語り継ぐという形をとる。」（MDT,21）

過去と和解することは、過去の問題（不正や悪）を解決したり、それから解放されたりすることではなく、過去を受けとめ共に担うことである。そのために人は過去を繰り返し語り継がねばならない。人間は過去に閉じ込められることなく、新たに始めることのできる自由な存在である。しかし新たに始めることは、過去を帳消しにすることではない。過去に閉じ込められるのでもなく、過去を帳消しにするのでもなく、過去を担いつつ新たに始める、そのために人は繰り返し語らねばならない。過去は現在のわたしを決定するのではなく、呼びかける。その呼びかけにどう応答するかは、わたしが自ら考え、判断しなければならない。その呼応が物語を始める。アレントが記すように、語ることは問題を解決することではないし、苦しみを和らげることもない。わたしたちにできるのは、その過去を現実として担い、それを理解すること、すなわちその現実自分がどう応えて生きるかを定めることである。アレントは過去を繰り返

し語ること、そこから生まれるものを待つことを説く。それは、呼びかけと応答という過去と現在との遣り取りが、終わりのない交わりであることを示している。過去を繰り返し語ることが歴史を支え、他者と繰り返し語ることが世界を支える。その交わりの中にしか人間の自由は成り立たない。

### 3. 呼びかけと応答としての政治

過去を共に担うこととして赦しを理解するなら、その根底にあるのは過去を受けとめ、応答することである。1951年5月の日記の中で、アレントは「人間的な現象に必然的に帰属する人間的応答」について記している。例えば貧困を人間的現象として捉えようとするなら、それへの「ふさわしい応答」(der adäquate Respons)は「道徳的な怒り」(moral indignation)である。それに対し、価値中立性の名のもとに貧困を客観化し「非人間化する」(dehumanisieren)ことは、貧困を人間的連帯の繋がりとしての公的生活から引き離すことである(DT-I,89)。この日記が書かれたのは『全体主義の起源』が発表された年であるが、7年後に発表される『人間の条件』で重要な位置を与えられる「公的生活」という概念がすでに現れ、人間的連帯の繋がりとして理解されている。そして公的生活を営む人間にとって、貧困へのふさわしい応答とは道徳的な怒りであるという考えは、アレントの姿勢を率直に現しており、日記だからこそ窺い知ることのできるものである。「公的」ということの意味の一つは、共有されるということであり、それは貧困という現象を他人事として客観視する態度とは異なる。人々が自由な存在としての人間を肯定する意志を共有し、それによって政治体を形成する限り、人間の自由を圧迫する貧困はこの政治体を掘り崩す不正である。貧困は個々の人間ではなく、公的生活そのものを脅かすのであり、人々の帰属する政治体そのものを揺るがす不正として共に担われる。この不正への怒りは憐れみから生まれる主観的な感傷ではなく、人々の人間的連帯から生まれる「道徳的な」怒りである。

しかし日記で貧困への道徳的な怒りについて記したアレントは、公表された著作の中でこの怒りに言及することはない。怒りはそれだけで不正を正すことはできない。そしてなにより、公的生活(人間的連帯)があつてはじめて貧困は不正として現れるのであり、また公的生活における行為と言論によってこそ不正は正されねばならない。この公的生活がいかんにして成り立つのか、その存立を脅かすものはなにか、公的生活が失われたとき人間はどうなるのか、それを明らかにすることがアレントの主題となる。しかし彼女の著作のうちに、人間に対する不正への怒り、その不正を共に担おうとする意志を感じ取ることは難しくない。人間の肯定から発する怒りは、和解をこそ志向する。では不正とは何か。1951年9月、アレントは日記のなかで記している。「ひとたび行為を手段/目的というカテゴリーで考え、政治の根本状況を部分/全体(個人/社会など)のカテゴリーで考えると、人間を手段として用い、全体のための部分として犠牲にすることは、もはや決して避けられない。」(DT-I,125)全体主義という問題に取り組んでいたアレントにとって、不正とは人間を他の目的のための単なる手段としてのみ用いること、個々の人間を全体(社会、国家、民族など)の部分と見なし、全体のために部分を犠

牲にすることであった。この不正に対抗するため、アレントは行為を、それ自体を目的とするひとつの始まりとして捉え、手段／目的のカテゴリーを越え出ようとした。また彼女は、個としての人間が行為によって自己自身を伝え、協力し合う場として公的領域を構想し、部分／全体のカテゴリーを脱却しようとした。この公的領域において、人々は不正を共通の問題として共に担い、それに対処するために協力する。公的領域において、ある人の行為（action）や発言は他の人々の反応（re-action）を呼び起こし、多様な行為や意見が交錯し、人々のまえでそれぞれの意味が評価・判断される。行為や発言の意味は、それを受けとめ判断する人々の視点によって変わるのであり、命令のように一方的に一義的に人を強制するものではない。行為と反応とは、原因と結果の関係のように因果法則によって一義的に決定できないのであり、むしろ呼びかけと応答の関係として捉えられる。行為は命じるのではなく呼びかけるのであり、その呼びかけをいかに受けとめ、応答するかは、応答する人が自分で考え、判断しなければならない。反応とはそれ自体が新たな始まりとしての行為であり、応答が更なる呼びかけとなる。

#### 4. 始まりとしての赦し

アレントは1953年2月、日記で再び赦しと和解について記している（ここでは両者は区別されていない）。行為の結果は取り返しがつかないのであり、赦しや和解はそれを元通りにすることではなく、始められた行為を、行為のうちにはない方向へと推し進めることである。それはすでに行われたことの「自動運動」（Automatismus）を断ち、そこに新たな始まりを据えることである、そうアレントは論じる（DT-1,312）。過去の不正は、放っておけばその不正を被った人々に憎しみを残し、不正を犯した人を過去の行為に縛り付ける。それによって人々は過去に閉じ込められ、分断と対立が永続する。それに対して赦すこと、過去の不正を共に担うことは、すでに為された行為のうち新たな始まりを持ち込み、別の方向へと推し進めることだとアレントは考える。それは実際にはどうすることなのか。日記にはそれ以上のことは書かれていない。しかしアレントが実際に行ったことは、『全体主義の起源』によって全体主義という現実を受けとめ、それがいかなる出来事であったかを理解しようと努め、そして同じ過ちを繰り返さないために我々が為すべきことを『人間の条件』のなかで論じることであった。この著作こそ、彼女が世界と和解するための試みであり、彼女が公にした作品の中で最初に赦しを論じたのもこの著作においてであった。赦しという反応（re-action）は、すでに為された不正を受けとめ、共に担い、応答することであり、それが新たな始まりとなって人に呼びかける。

赦すことが、すでに行われたことの自動運動を断つことであるなら、それは人間の行為を目的／手段のカテゴリーから解放することを必要とする。それはまた、行為をそれ自体においてありのままに受けとめることである。アレントは1951年9月の日記のなかで、物事を目的連関から解放して「あるがままにする」（Seinlassen）ことについて触れており、少なくともカント的な意味での「美」は目的連関から解放されていると記している（DT-1,130）。目的連関のうちに組み込まれた事物や活動は、その役目がすでに決まっている道具的な存在である。目的連関から解放されたとき、出来事や行為は、それを見聞きする人間に対し、その出来事や行為そ



れ自体の意味を問いかけてくる呼びかけとして現れる。人は行為を目的／手段の連関から解放することにより、その意味を問い、受けとめ、応答する（新たな始まりを持ち込む）途へと開かれる。それと同時に、歴史が目的と手段という因果連関から解放されるとき、過去と現在のあいだには必然的な連関がなくなる。人は過去の出来事を思い起こすことによって、過去と現在との絆を生み出さなければならない。アレントが「出来事の意味が生き続ける限り、過去との和解はそれを繰り返して語り継ぐという形をとる。」と記したのは、その故である。

アレントは亡命先のパリでベンヤミンと出会い、彼の「歴史の概念について」などの原稿を託されていた<sup>3</sup>。ベンヤミンはこの未完の作品の中で、次のように述べている。

「過ぎ去ったことを歴史的に明確に表す (artikulieren) ことは、〈その時それが元々あった通りに〉認識することではない。それは危機の瞬間にひらめくような想起を手に入れることである。(…) 危機は、伝統の存続と伝統の受け手とをともに脅かしている。どちらにとっても危機は同じひとつのこと、すなわち支配階級の道具となって力を貸すことである。どの時代にも人は、伝承を押しつづそうとする順応主義から伝承を勝ち取るべく、新たに試みなければならない。」<sup>4</sup>

ベンヤミンは、人々が支配階級の道具となる順応主義を「危機」と呼ぶ。支配者は人々が現体制を無条件に肯定し順応することを望む。そのために歴史を人類の進歩という連続的なプロセスとして表象し、現在の支配体制はその進歩の頂点に立つものであると喧伝する。そして過去に犯された過ちはすべて現在に至るための方途として正当化され、あるいは美化される。つまり手段／目的のカテゴリーによって歴史が説明される。順応主義という政治的危機に対し、ベンヤミンは現在を正統化する歴史の連続を打ち砕くため、現在の関心から過去を意味づけるのではなく、過去がそれ自身の光でひらめき、現在への問いかけとして明確な姿を現すように、過去を受け取ることを説く。過去を〈それがあった通りに〉認識するのではなく、過去が現在を照らし出し問い質す光となるように際立たせることが、過去に「歴史的に」明確な姿を与えることだとベンヤミンは言うのである<sup>5</sup>。現在の支配階級を批判するためには、それが権力に就くために過去にいかなる抑圧を行い暴力を揮ったかを明らかにしなければならない。過去の視点を持つことは、歴史を進歩という連続的な過程として表象するのを拒絶し、現在を照射し批判するための隔たりを設定することである。アレントの言う「赦し」もまた、連続的な過程としての歴史（自動運動）のうちに裂け目を入れ、過去の行いや出来事をそれ自体として救いだし、共に担い、その問いかけに応えようとするのである。

## 5. 理解と政治

行為と言論という仕方で交わることにより、人々は互いを手段として用いる道具連関とは異なる仕方で繋がり、協力することができる。1952年1月の日記でアレントは次のように記している。「人々が共になにかをやろうとするとき、常に権力 (Macht) が成立するということ、

それが複数性の根本現象である。政治があいだの領域 (Bereich des Zwischen) に生まれるという根拠はここにある。」(DT-1,160)。政治的な権力は道具連関の内部の強制力ではなく、複数の人々の〈あいだ〉に、協力のなかに生まれるという権力観は、後に「暴力について」(1969)という論文でも踏襲されるアレントの独特の考え方である(CR,143)。そして同じ1952年の12月の日記には、人々が行為する〈あいだの領域〉に権力が生まれること、行為する人々はその権力に従い、規定されること、そして被ること(受動)と行為とは裏表の関係にあることが記されている(DT-1,283)。行為(呼びかけ)は新たな始まりであるが、それは一方的なはたらきではなく、反応(応答)があつてはじめて世界における現実としてはたらく。反応(応答)もまた単なる受動ではなく、新たな始まりとして更なる反応を呼び起こす。行為と言論によるこの相互的な繋がりが公的領域を形成し、その相互性のなかで権力が成り立つ。部分/全体の関係においては、部分は全体(国家、民族、社会)の決定に一方的に規定され、全体のために存在し、その犠牲となる。アレントの理解する政治体は、一方的な部分/全体の関係を越え、人々が互いを自由な存在として肯定する意志を共有することによって成り立つ。このような政治体の権力に、個々の人間の行為は規定される。なぜなら行為は応答を必要とする活動なのであり、互いの存在を肯定する人々のあいだでこそ可能だからである。

人々が行為を通じて結びつき、そこから権力を立ち上げ、その権力が同時に人々の行為を規定する、ここに政治的生活が成り立つ。そして政治的生活を営むうえでアレントが重視したのが判断力であった。政治的判断力について、彼女は晩年の未完の著『精神の生活』の第3章で詳しく論じるはずであったが、それを書くことなくこの世を去った。しかし既に1952年12月の日記には、政治的意志に目標(行く先 Ziel)を示すはたらきとして判断力が現れており、政治的意志は判断力に依存するという考えが記されている(DT-1,286-287)。その箇所ではアレントは、製作における目的(Zweck)と意志にとっての目標とを区別するが、この区別によって彼女は目的/手段のカテゴリーを避けようとしていると思われる。製作における目的は推論という「孤立の思考」(Denken der Verlassenheit)によって導出されるのに対し、政治的意志に目標を指示する判断力は「共同存在の思考」(Denken des Zusammenseins)であり、「相互に統御すること」(das gegenseitige Sich-kontrollieren)であると彼女は規定する。船を造るとき、その設計図は設計者が一人で計算し考え出すことができる。そして造船所の作業員は設計図に従って船を造る。それに対し、人々が協力してなにかを始めようとするとき、その目標は話し合いを通して取り決められる。そのとき人々は、自分の考えを述べるだけでなく、他の人々の考えも聞き、それぞれの考えを比較検討し、批判し、補い、よりよい意見を求めて知恵を絞る。そこで目指されているのは、すべての人が納得して受け入れることのできる目標であり、誰かが一方的に他の人に命令するのではなく、互いに制御することである。その場面ではたらくのが「共同存在の思考」としての政治的判断力である。さらに翌1953年3月の日記では、アレントは行為を可能にする「理解」という思考にも注目している。それは現実を受け入れ、和解し、現実に所属することを可能にする政治独特の思考であり、他者の立場に立つことである(DT-1,331-332)。この思考は、後に「文化の危機」(1960)において、あらゆる人々の立場に立つて考える「拡大された心性」として、あるいは「真理と政治」(1967)における「言説による

再現前化の思考」として展開されていくものであり、アレントにとって政治的生活の要となる重要な思考様式であった。

後にアレントは、カントの『判断力批判』、特に第40節の「共同体感覚」としての共通感覚 (sensus communis) に着目しつつ、それを政治的判断力へと仕上げていった。それは原理からの論理的推論によって結論を出すのではなく、多様な意見を多様な視点から偏りなく公平に比較考量し、最善の意見を「目標」として判断するはたらきである。政治的生活における判断力のはたらきに注目する彼女の姿勢の端緒を1950-1953年頃の日記に探るなら、それは目的／手段あるいは部分／全体というカテゴリーの適用されない領域として政治を構想する立場であり、人間を手段ないし部分として犠牲にしない主権（権力）のかたちであり、「あいだの領域」に成り立つ政治体のイメージであったことがわかる。

#### 【註】

<sup>1</sup> アレントの著作、遺稿、日記からの引用は、本文中の（ ）内に、略号と頁数を記す。略号は以下の通り。

OT: *The Origins of Totalitarianism*, Harcourt Brace & Company, 1979 [1951]

HC: *The Human Condition*, University of Chicago Press, second edition, 1998 [1958]

BPF: *Between Past and Future*, Penguin Books, 1993 [1968]

MDT: *Men in Dark Times*, Harcourt Brace & Company, 1971 [1968]

CR: *Crises of the Republic*, Harcourt Brace & Company, 1972

LM: *The Life of the Mind*, Harcourt Brace & Company, 1989 [1978]

EU: *Essays in Understanding*, ed. Jerome Kohn, Harcourt Brace & Company, 1994

RJ: *Responsibility and Judgment*, ed. Jerome Kohn, Schocken Books, 2003

DT: *Denktagebuch 1950-1973*, hrsg. von Ursula Ludz und Ingeborg Nortmann, Piper Verlag, 2002

以下の邦訳を参照させていただいたが、筆者の責任により、訳文の一部あるいは全部を変えた箇所がある。

『全体主義の起源 1, 2, 3』（大久保和郎・大島通義・大島かおり訳、みすず書房、1981）

『人間の条件』（志水速雄訳、ちくま学芸文庫、1994）

『過去と未来の間』（引田隆也、齋藤純一訳、みすず書房、1994）

『暗い時代の人々』（阿部斉訳、河出書房新社、1995）

『精神の生活（上下）』（佐藤和夫訳、岩波書店、1994）

『暴力について』（山田正行訳、みすず書房、2000）

『アレント政治思想集成 1, 2』（齋藤純一・山田正行・矢野久美子訳、みすず書房、2002）

『思索日記Ⅰ、Ⅱ』（ルッツ、ノルトマン編、青木隆嘉訳、法政大学出版局、2006）

<sup>2</sup> Ronald Beiner, "Love and Worldliness: Hannah Arendt's Reading of Saint Augustine," in Larry May and Jerome Kohn(eds.), *Hannah Arendt, Twenty Years Later*, The MIT Press, 1997, pp. 280-281. アレントはヤスパースに宛てた手紙（1955年8月6日付）のなかで、ここ数年になって初めて世界を本当に愛するようになったこと、また当時執筆中だった著作（『人間の条件』）を「感謝の気持ちから」（aus Dankbarkeit）『世界への愛』（Amor Mundi）と名付けたいと思うことを伝えている。世界を愛することは、この世界が在ることを無条件に肯定すること、それを感謝することである。バーンスタインはこの手紙の文の内に、ユダヤ教の伝統におけるもっとも輝かしい要素が反響していると指摘し、アレントの非宗教的な「信」（faith）が神ではなく神の創った世界を中心とするものであると論じている。

Cf., Köhler und Saner(Hg.), *Hannah Arendt, Karl Jaspers Briefwechsel 1962-1969*, Piper Verlag GmbH, 1985, p. 301. Richard Bernstein, *Hannah Arendt and the Jewish Question*, The MIT Press, 1996, p. 188.

<sup>3</sup> 川崎修、『アレント』（講談社、1998）、25頁。

<sup>4</sup> Walter Benjamin, *Gesammelte Schriften*, Band I-2, Suhrkamp Taschenbuch Wissenschaft, 1991, p. 695. 邦訳は野村修編訳『暴力批判論』（岩波文庫、1994）を参照させていただいた。

<sup>5</sup> ステファン・モーゼスによれば、ベンヤミンにとって歴史とは進歩の不可逆的運動を証すものではなく、同一のものが常に舞い戻ってくるという強迫的傾向と、絶対的に新たなものの出現との、絶えざる闘争の場である。過去の不正が永続するのは「惰性」（inertie）によるのであり、それは根本的に新たなものの出現によってしか断ち切ることはできない。この「根本的に新たなもの」をベンヤミンは「救済」と呼んだ。ここには、アレントの言う「自動運動」と、それを断ち切る「赦し」との関係と同じ関係が見て取れる。Cf., Stéphane Mosès, *L'ange de l'histoire*, Gallimard, 2006, pp. 213-215. 邦訳は合田正人訳『歴史の天使』（法政大学出版局、2003）を参照させていただいた。

# Action and Forgiveness

**KAMEKI Makoto**

In *The Human Condition*, Hannah Arendt writes that the faculty of forgiving compensates the irreversibility of an action. And in her diary, she writes that to forgive is not to forget faults committed by others, but to take them on with others. Man can forgive a person in order to maintain the foundation of humane relation. We can be politically free only in relation to others, and we can forgive a person to affirm unconditionally the human being as free being.

Arendt thinks that, in order to reconcile oneself with the reality, man have to tell it again and again. Telling the past event is reflecting upon its meaning and accepting it in one's life. In order to reconcile oneself with the world, we should not forget away the injustice committed in the past, but tell it over and over again and take it on with others. It requires that we respond to the call of past events.

For Arendt, we can forgive a person only in human relation realized by action and reaction, which we can consider as call and response. It is this relation which, transcending the categories of means/end, enables us to live our political life. By the faculty of forgiving we can liberate ourselves from the automatism of means/end and take an initiative in order to reconcile ourselves with the world.

When we relate each other by action and speech and establish power in this relation, we need not solitary thinking called reasoning but thinking of communal existence called judgment. It is a way of thinking impartially which considers from the others' viewpoint. In 1952, before publishing *The Human Condition*, Arendt has already described such conception of political life in her diary.